Mitsui Garden Hotel Kyoto Shinmachi Bettei

concept book

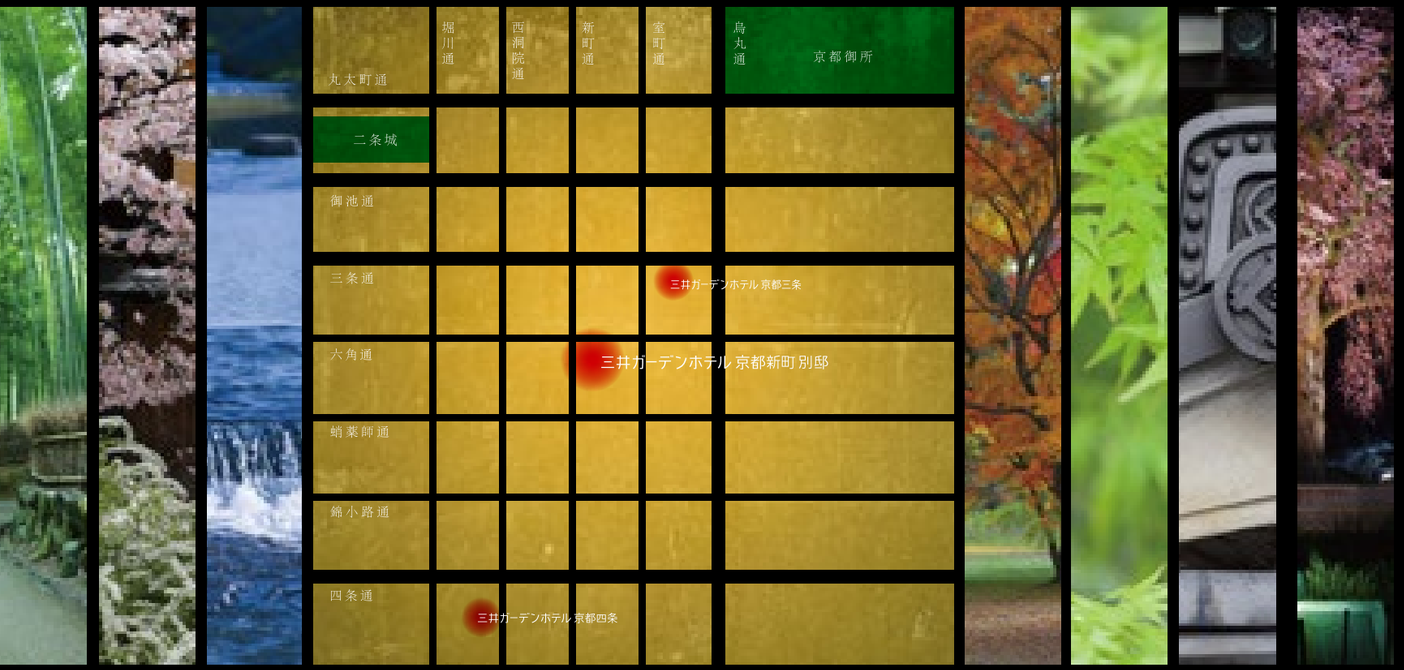
京を継ぐ

京の伝統を、
継承し、再生する。

刻一刻の、風、雪、雨という自然の営みを、
移りゆく、花、緑、紅葉、果実という四季の様々を、
嫌うことなく、まっすぐに捉え、どっぷりと愉しむ。

京は、この文化を平安遷都から千年余も守り、
深く芳醇な色を、今に受け継いでいるのではないかと考えます。

京の真ん中で、京の雰囲気にどっぷりと包まれる。
三井ガーデンホテルが描く“京都らしさ”のアンサーを、
ゆっくりと、こころゆくまでご堪能ください。



歴史を重ねた伝統。旧松坂屋、その地に。

新町筋界隈は、千年の都・京都にあっても特別な場所であった。江戸時代より呉服問屋の大店が軒を連ね、独特な佇まいを現在に伝えている。とりわけ、この地は旧松坂屋の京都仕入店でもあり、京都においても残された数少ない「大店の構え」を有していた。その建築は、明治36年に建てられた。表側は商家らしく質実な造りで、中庭をはさんだ居宅は数寄屋普請で、銘木・銘石がおしみなく使われていた。とりわけ、「おくど」部分の小屋組み、欅の大黒柱などは、現在では造れないものであった。幾つもある坪庭や中庭には、風雪を重ねた銘石がさりげなく点在していた。また、ここは古えからの染織物を収集・研究する場でもあった。古代の裂地(きれじ)、江戸時代の小袖などが集められており、町家にはその息吹が満ちていた。

京都の中心に相応しき、名蹟の伝統を、継承し、再生する。

基本構想
石川雅英
アーキテクツオフィス代表
清水建設設計本部に
20年勤務後、2005年独立。
【代表作】
本陣平野屋花兆庵
西麻布櫛八
飛騨高山飯坂酒造店
タラサ志摩
交詢ビルディングほか

人々がそれまで培ってきた歴史・記憶・憧れを継承したいと思った。その一つが、通りの佇まいである「大店の構え」であった。蔵を有し、泰然と構える大店の姿の記憶こそが、受け継いでいきたいものであると考えた。敷地奥にあった居宅部分の「おくど」の小屋組みの闇や、大黒柱・大きな梁は、京都らしい古い町家の記憶への憧れそのものであった。それをエントランス部分に移築し、再現することにより、京都への憧れを意図している。中庭を中心として、処々に坪庭が点在する空間の広がりは、京都の町家の構成そのものである。京都は、日本人にとって特別な地だ。人々の憧れであるその佇まいを後世に伝えていきたい。建築の姿形を残すことのみが伝統を継承することではない。人々が持つ記憶、郷愁、感性に訴えるものを、新しい表現と一体化して伝えていくことが、再生ではないかと考えた。例えば、昔の太い梁はエントランスの天井に広がる闇に沈み、雨に打たれた石の肌合いは新しい庭に溶け込み、人々の感性の深い部分に訴えることが出来ると思う。そして、新しく生まれ変わった中庭の木々のゆらめきや影を見たり、隙間に点在する坪庭に苔を愛でることで、京都を実感してもらえると思う。

「大店」の記憶を遺しながら、いかにして新しいものをつくりあげるかという主題に対し、具体的なプランとしてイメージしていったのは、堂々としたかつての姿で人々を迎え入れ、「間(ま)」をつなぐように展開された空間で穏やかにもてなす、「邸(やしき)」のような構成と意匠であった。それを、大店の外観再現、大黒柱移築、アートなどの保存材再生といった特徴的な要素をとり入れつつ現代的で魅力的な建築として完成させるには、法的・技術的課題をひとつずつクリアする必要があった。たとえば外部の低層木造部分は、躯体から複雑に持ち出した支持材の上に京町家特有の軸組を構築することで、耐火建築物としての性能を確保しつつ普通の木造建築と変わらない旧来の姿を再現した。また、墨色に仕上げたコンクリート打放し部分は高精度の躯体と、仕上げに取り組んだ職人たちの技術探究と緻密な作業によってねらいどおりの表情を醸し出せた。この建物の内外には、歴史の記憶とともに、関わった多くの者たちの熱意の跡がある。ここを訪れる人の心に、それらが「ここちよさ」として伝わることができたなら、設計者として幸いである。

建築設計
小林浩明
株式会社竹中工務店
大阪本店設計部
京都工芸繊維大学大学院修了後、
株式会社竹中工務店入社。
現在、大阪本店設計部在籍。
【代表作】
曽根崎一丁目店舗
西心斎橋Nビル
梅田北ヤード(グランフロント大阪)北棟ほか。

木の彩り

縁(えにし)しが刻む
優美なひととき。

伝統と革新が織りなす、詩情豊かなアートワーク。

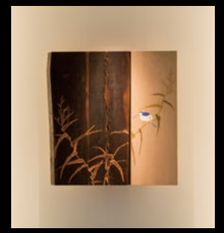
アートワーク
小清水漸

愛媛県宇和島市生まれ
京都市立芸術大学名誉教授
【主な受賞歴】
2004年紫綬褒章
1999年京都府文化賞功労賞
1993年第18回吉田五十八賞
1980年中原悌二郎賞、他多数。
【主なPublic Collection】
東京国立近代美術館(東京)
国立国際美術館(大阪)
Tate Modern(London)
The Pinault Collection
(Punta della Dogana/Venice)
The Rachofsky Collection(Dallas)

フロント・ロビーを飾る、小清水漸氏の新作木彫作品。

ホテル敷地にはかつて旧松坂屋京都仕入店・染織参考館があり、作品に使われた木も紋様もその縁しを作品の素材としている。木材は旧松坂屋京都仕入店で使われた古材。紋様は染織参考館が所有していた小袖の意匠。作家は歴史と伝統美を木彫作品に織り上げ、調和と革新が鮮やかに融合した格調高い現代美術を実現した。

ホテル内の各階EVホールにも、小清水氏の木彫作品。



白い漆喰の壁に映える瀟洒な木彫作品。京の新たな「粋」を演出するアートワークが各階に配されている。

Art Produce : TAK PROPERTY INC.

石の眺め

石材と植物で描く、
飽きのこない美しさ。

単なる和風や伝統に留まらない、華やかさの極み。

庭園設計
荻野寿也

1960年大阪府生まれ。
1999年、自宅アトリエが第10回
みどりの景観賞
(大阪施設緑化賞)を受賞。
以降独学で造園を学ぶ。
2006年、設計部門として
荻野寿也景観設計を設立。
2013年、松本市景観賞受賞。
原風景再生をテーマに造園設計・
施工を手がける。建築家との協働多数。
【代表作】
アトリエ・ビスクドール
後山山荘(聴竹居@鞆の浦)
木屋旅館 など。

街並に相応しい、伝統的な庭の風情。

美しい山河に囲まれ、日本中から多様な人々や物・文化が行き交う坩堝であった、京の都。集まるエネルギーが昇華され、独特の華やかな風情として、京都の街や建築・庭に色濃く反映されている。そのエネルギーを呼び込むような華やかさを、現代の京都らしさを醸し出す庭の性質として捉え、また、加茂七石や旧松坂屋の石なども使い伝統を引き継ぎながら、次の時代へ受け渡す庭として造園を行った。訪れる人々が、はんなりとした情緒を実感いただけるような庭を考え、エントランスの迎え庭では、手水鉢をはじめ、盃状穴や矢跡の残った石、建築の礎石などの旧松坂屋にあった古い趣きのある石を用いた。

日本の原風景を再現する、大きな中庭。

新鮮な驚きや、瑞々しい郷愁感、新しい京都らしさを感じていただきたく、ここでは九州から東北までの様々な樹木が植えられており、日本の緑豊かな風景が凝縮されたような庭になっている。人の手が入ったようには見えない自然な庭を目指し、レストランに訪れるお客様も外で食事をしているような気分になれる中庭を演出した。生け花のようにこの高く上に抜ける中庭の器に適した大中小の樹木を活け込んでおり、全体で見ると苔寺のように、大胆かつ繊細な原植生の森に近い庭であり、足下には川砂利・川砂を用いることで、元々川が流れていたように見える枯山水にもなっている。また照明は、すべて上からの淡い光で、自然の月明かりをに演出し、安らぎのシーンを創出した。

3階・屋上庭園には、枯山水の庭。

1階中庭の緑豊かな庭から一変し、白川砂利によってやわらかく反射された光が室内へと溢れる庭となり、自然の光を十分に届けることができる。客室へ向かう途中にも静かな庭を眺めることで心を澄ましながら、京都らしさを感じていただける。また上階からもこの屋上庭園を見下ろせ、雲海に浮かぶ大陸をイメージした石組みを行い、世界地図のように、五大陸が大海に浮かんでいる様子を砂利と石で表現した。

土の憩い

永く受け継いだ、
地の歴史を、未来へ継ぐ。

レストラン設計
永山祐子

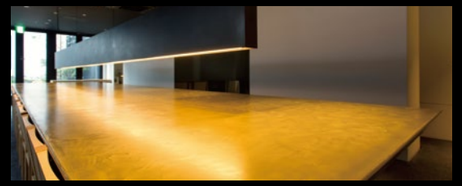
1975年東京生まれ。
2002年永山祐子建築設計設立。
【主な仕事】
LOUIS VUITTON 京都大丸店
丘のある家
ANTEPRIMA Singapore ION店
カヤバ珈琲
SISII PRESSROOM など。
【主な賞歴】
ロレアル賞奨励賞
JCDデザイン賞奨励賞
AR Awards優秀賞
ARCHITECTURAL RECORD Award
Design Vanguard 2012など。

美しい中庭を借景にした、表情豊かな空間。

漆喰壁を現代風にアレンジした、和モダンの空間。

京都の中心地、中京区の歴史ある街路に位置し、古い蔵と中庭を望む和食レストラン。蔵の外装仕上げでもある漆喰の白い壁を極限まで薄くし、店内の仕切りとし、漆喰の柔らかさを持ちながら、中庭の風景、店内のシーンをシャープに切り取るフレームとなっている。

ろうそくのような幻想的な光を放つ、真鍮の大テーブル。



また、中央の真鍮の大テーブルは薄暗い空間の中でろうそくの光のような鈍い光を放つ。京都の町家のようにシンプルな素材、構成ながら清々とした緊張感のある空間を目指した。外部からの光により時間帯によって空間の感じ方が様々に変化する。

既存の蔵を生かした、離れの静謐な空間。

蔵を茶室に見立て、この部分を茶庭の露地として見立てながら庭を構成した。加茂七石という、二条城に所縁のある歴史的な石が旧松坂屋の既存石として保存されていたので、それを庭石として用いている。露地で一瞬心を澄ました後、離れへと訪れていただきたい。